慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Gervase Mathew : The Court of Richard II : London : John Murray, 1968.
Sub Title	
Author	池上, 忠弘(Ikegami, Tadahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.117(32)- 125(24)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Gervase Mathew: *The Court of Richard II*

London: John Murray, 1968.

池 上 忠 弘

14世紀後半の文学を参考にしながら，事実と虚構の「騎士道」の慣例を巧みに分析した，"Ideals of Knighthood in Late-Fourteenth-Century England" (*Studies in Medieval History Presented to F. M. Powicke*, Oxford, 1948, pp. 354-62)，ついで "Marriage and *Amour Courtois* in Late-Fourteenth-Century England" (*Essays Presented to Charles Williams*, Oxford, 1947, pp. 128-35), "Ideals of Friendship" (*Patterns of Love and Courtesy: Essays in Memory of C. S. Lewis*, ed. John Lawlor, London, 1966, pp. 45-53) といった問題のツボをとらえた論文を読むにおよんで，私は本書（上記の諸論文は当然この中は生かされているが）の著者の研究を注目するようになった。Rev. Anthony Gervase Mathew (1905-) 氏の経歴は，*Who's Who 1968* によれば，Balliol College, Oxford 卒業後 1928 年には Dominican Order に入り，37 年には母校の Greek Patristics と Byzantine Art and Archaeology の講師，47年以来 Byzantine Studies の University Lecturer であり，その成果は *Byzantine Painting* (1950)，*Byzantine Aesthetics* (1963) として公けにされた。彼は西欧中世との関係の再評価がさかんに行なわれているビザンチン研究の専門家である一方，History Faculty の一員として38年以来 Medieval Social Theory を，English Faculty の一員として45年以来14世紀英文学を担当し，さらに50年以来アフリカ諸国の考古学調査にも参画してい

る。一言でいえば，彼の研究は Oxford University での教育・研究・討論の結果生れてきたものである。

本書の序文で，本書の成立事情が端的に述べられている。著名な Maurice Powicke 教授の示唆により，はじめ政治史と社会的理想分析を兼ねた14世紀後半のイギリスを記述する計画であったが，後に同時代の文学の急速な発展や絵画彫刻の芸術上の変革を知り，これらの諸要素が相互にからみ合って切り離せない国際的なものであるという認識から，結局 Richard II (1367–99) を中心にすえた主として 1380，1390年代のイギリスの国際的宮廷文化を取扱うことになったのである。数多くの写本に直接あたり，政治史を軸として文学美術をからませた人間くさい生きた文化史であり，当時の物事を的確に把握している14世紀末の context にはめて理解しようとするのが，著者の特徴的な態度である。18章本文 177頁全体の構成は各章が有機的に関連し合い，Richard II 統治は大きく前期と後期に分けられ，特に後期に熱がこめられて劇的な結末へと進んで行く。こまかい部分でも面白いところが多々あるが，ここでは，重要と思われる問題点と私自身にとって興味深い点に焦点を合わせて，紹介を主として述べて行きたい。

身分の高い影響力をもった女性の存在，厳格な儀礼，文芸の庇護，宮廷人の集団，贅沢，流行などを特徴とする西ヨーロッパの国際的宮廷社会は，著者によれば，ナポリ王国の Robert of Anjou 王時代 (1309–43) にはじめて現われ，これは国王自身の趣味と個性の産物であるとし，この流れは次いで Milano, Padua に現われ，Avignon を経て Prague, Paris, London へ伝えられたという。パリーの Valois court の強い影響を受けた bilingual のイギリス宮廷は，プラハから王妃を迎え，Westminster, the Tower, Eltham, Langley, Sheen, 後に Windsor Manor で営まれる。entertainment の一つとして，ここでは長い物語詩が好まれ，minstrels に代って作者自ら続き物の如く朗読するようになるが，その代表的な宮廷詩は Chaucer の *Parlement of Foules* と *Legend of Good Women* である。背が高く，濃い黄色の髪を肩までたらし，青白い肌，きれいに髭をそった

美貌の持主 Richard は僅か10才で即位し，まだ無力で王権の拡張をめざした 80 年代の主な事件といえば，彼自身の機転と勇気，聖母マリアの加護により乗り切ったといわれる Peasants' Revolt (81年6月)，神聖ローマ皇帝カール4世の王女 Anne of Luxemburg との結婚(82年1月14日)，86年 Lords Appellant の攻撃を受けたことであろう。(pp. 15–20)

Richard は友情にあつく，向う見ずで，家臣に物品や肩書を与えたがる性格であったが，彼自身の趣味が宮廷の特質に影響を及ぼしたものとしては，宝石類・豪華な写本や上等な異国風の料理愛好，服装への熱烈な関心が挙げられる。(pp. 22–31) Richard は13才のとき，28ポンドで「ばら物語」, Gawain and Percival のロマンス，仏文の聖書を買っており，後には書斉に多数の写本を所蔵している。料理については，*The Forme of Cury* が現存して196品目の料理法が伝えられ，例えば，'potage' は鹿肉の汁，main dish の一つにはキジのひき肉をベースにギリシャの白ぶどう酒，肉桂，丁子，しょうがを加え，さらに2ポンドの砂糖を加えた 'mawmenee' があり，'sotiltee' には桑の実を蜜で煮た 'moree' がある。服装については，その技術が芸術化した時期に当り，洋服屋は男子の長い手足，広い肩，細い腰を強調するために，とくに 'cote hardie' (紋章を刺繍し，腰帯をつける upper doublet), 'houpelande' (長い袖と高い襟の gown) には腕をふるった。ゆったりした頭巾，長い袖の gown，多数の宝石類・金の使用が流行だった。女性の fashion は保守的であった。

美術面は断片的ではあるが，Herman Scheere や John Siferwas のような masters が現われ，処理の繊細・洗練，原色の結合，高価な材料使用などが特徴的である。聖俗の題材を描いた tapestries も大変流行したが，最高の傑作は現在 National Gallery 所蔵の Wilton Diptych (**図版参照**) である。(pp. 47–9) 14½×21インチの二連祭壇画で，miniature 手法で描かれた 1395年頃制作の後期ゴシックの優雅な気品にあふれる作品(テンペラ画) である。Richard の即位式をあらわしているという。左板は守護聖人である St. John the Baptist, King Edmund the Martyr, King Edward the Confessor に先導されて，若き Richard がひざまずいて両手

を差し出している。右板はいわば Court of Heaven で，女性的な 11 angels に囲まれ，聖母マリアにいだかれた子供のキリストが St. George の旗を Richard に手渡そうとしている。金地にマリアと天使たちの青い服の色彩が効果的である。金むくの豪奢な Richard の服装，ばらの花冠，首飾り，胸に白鹿の記章をつけた天使の服装に注意しよう。broom と white hart は Richard の紋章である。

このような華麗な宮廷とロンドンの haut bourgeoisie を主要な読（聴）者とし，彼らの要望に答えた新しい文学が生れてくることになる。love allegory を散文で扱った Thomas Usk の *Testament of Love*, 下役人としてその喜びや苦悩を率直に語り自叙伝的要素のつよい Thomas Hoccleve, monk of Bury としてよりはむしろロンドンに長く住んだ宮廷詩人として考えるべき aureate style の多作な John Lydgate は，再考の余地のある作家たちである。いずれも Chaucer と関係がある。続いて，14世紀後半を代表する 3 人の詩人論が語られる。宮廷人・外交官である Chaucer の文学は青年期と成熟期に分け，翻訳 *Boece* (1377–81) がその境目と考え，

宮廷よりももっと広い読者層を相手にし，新しい韻律法を駆使して Fortune と tragedy を重要な主題とするようになる *Troilus and Criseyde* では，Pandarus はこっけいな人物と考えるべきでなく，当時の経験豊富な宮廷人を具現しているとし，Criseyde も移り気な女と非難されるが，こわがる気の弱い愛すべき女だったという。当時大変な人気だった *Canterbury Tales* は，そのうちの7編はこの物語の構想が生まれる以前にすでに出来上っていたものであり，最終的には未完のまま改訂も行われず，Chaucer は死ぬまで手をつけていたらしいが，最後の *Parson's Tale* はぎごちない翻訳調で，これは interpolation か，あるいは死を悟った Chaucer が rough draft として書いたものと著者は考えている。

Gower は元来抒情詩人から出発した作家で，自活していた。*Confessio Amantis* の 1st version は Richard に捧げられ，口語的な宮廷英語で書かれ，全体的統一のとれた自叙伝として読まれるべきだと主張している。攻撃的で毒舌の多い，Anglo-Norman 語で書かれた *Mirour de l'Omme* は信心深いロンドンの羊毛業者のために書かれ，ラテン語で書かれた *Vox Clamantis*（この第1巻は彼の立場からみた Peasants' Revolt を扱う）は知識人を相手にしたものである。結局，宮廷とロンドンの上層階級が彼の読者層であった。

Moral Gower の *M.O.* と *V.C.* が古くからの学問・知識を背景に，教訓的目的で，正義と公正の崩れた現世の悪をあばきだし，美と恐怖が交錯しているところで，Langland と共通する点がある。学問的な詩 *Piers Plowman* は recitation による伝達のため現存 text の状態が余りよくなく，著者の印象では A, B, C ともに原作よりある距離があるようで，原作に最も近い A は1381年以前に書かれた第1草稿，A を拡大した B は Richard 王の初期時代，最終校訂に基く C は Richard 親政時代の政治風土を反映しているという。写本の variant reading から，読者はロンドンや南部・西部に住む信心深い町の中産階級，敬虔な教区司祭や地主が想像され，Lollards に同情的な中産階級に訴えるものがあった。Langland は予言者として完徳への道を説いた。justice と charity がこの長詩の基本

的概念で，後者の三段階，incipiens・proficiens・perfecta がそれぞれ Dowel, Dobet, Dobest に相当するという。この辺はよりくわしい説明が欲しいところであろう。

P. P. は，ハンザ都市と貿易上の交流がある East Anglia 地方の教会の壁画に見られる主題，Seven Deadly Sins, Seven Works of Mercy, 聖者伝 St. Catherine of Alexandria とつながるところがある。これには宮廷派の影響がなく，Margery Kempe や東北部の metrical romances にみられる，抬頭してきた新しい地方中産階級の支持と注文があったのだ。私見では，内外の神秘主義の動向もこの視野の中に入るだろう。

この時期は慢性的な経済不況下にあり，生産力の停滞，人口の激減，労賃の高騰，重い課税などがみられるが，政治面は，1290年で封建制度がこわれ，代って estates の大きさに基く政治的影響力をもった一群の great magnates（年収 3,000ポンド前後）が主導権を握り，また彼らの households が Edward III 時代風の小さな宮廷の呈をなして文芸庇護の中心地となった。Richard II 後期の政治は，多くは悪い影響を受けまいと中立を保ったが，幾分かの magnates の支持を得た宮廷と激動する magnates の少数グループとの対立抗争によって展開され，当事者がどちら側に帰属するかは knighthood と loyalty の論理によると著者は考えている。(pp. 114–28) その knighthood は Chandos Herald の Anglo-Norman 語の韻文「黒太子伝」，*Sir Gawain and the Green Knight*（同一写本内に古風な聖書解説と説教詩の *Patience* と *Cleanness*，新しい知的な didactic elegy の *Pearl* を含み，original MS は repertory book という），*Sir Degrevant*（ロンドン英語の song book の中に混入）によって分析され，騎士を名誉づけるものは prowess が根本で，それは遠くの未知の国にわけ入る adventures によって最もよく実証される。騎士は本性上個人的同情から悪を正す者であり，さらに騎士に必要な性質として“largesse, franchyse, cortaysie”が付加される。Richard はこれらの要素を持ちあわせていたが，不幸にしてそのすべてが裏目に出た。当時の理想的な騎士とは，勇気があり，良家の出，育ちもよく，教養のある人間であった。

結婚については，love service, amour courtois の方式を考えるのが当時の貴族階級の流行で，Edward of Woodstock, John of Gaunt, Richard の場合の如く，結婚と romantic love は密接な関係にあった。(pp. 129–37) 物語の理想的な女主人公は，初期ロマンスの Felice (*Gui de Warewic*), La Fiere (*Ipomedon*), Ydoine (*Amadas*) のような理想像が長く尊重され，美貌，賢明，自制心，学問，自尊心が要求された。beauty とは，*Descriptio Puellae* にある通り，金髪，白い肌，濃い眉毛，澄んだあおい目，そしてほっそりしていることであった。この女主人公はやがて彼女の恋人と対等の愛情的立場に立って，彼と同じような adventure をもち，鎧をつけて戦う勇しい女性も出てくる。むずかしい試練によって貞節と勇気を試すために女主人公を隔離したり追放したりして危険にさらし，これに conflicting loyalties をからませた物語が好まれるようになる。

一方，貴族階級における loyalty は個人としての男と男の間の友情に基く社会的人間関係には欠くことのできないものである。(pp. 138–45) 起源は，著者の説では Cicero の "amicitia" に遡るけれども，*Amis and Amiloun* にみられる通り，友情は対等な相互扶助的関係であり，友人のためにはわが子さえ殺してしまうほどの激しい愛情を発露したとしても，これはホモとは別個のものである。しかし友人関係と男女の愛人関係との相違は，そして類似は微妙なところがある。友人を，そして主君を裏切ることは騎士の最大の悪事とされ，Tristram や Lancelot の運命もその見地から考えねばならない。conflict of loyalties は，現実にも物語にもよく見られた現象であったと著者はいっているけれども，私見としては，著者の，現実と虚構との間に屈折ないし落差はなく，両者は直接無理なくつながって表裏の関係をなしているという考え方には多少疑念を感ずる。

Anne の急死後，僅か7才のフランス王女 Isabella と再婚した Richard は，1397年秋にはこれまでになく強力となり，贅沢な宮廷を営んだが，財政危機をかかえ，9 magnates に左右されたその後の政治史の筋書は，抗争する loyalties に依ると著者は分析している。Richard がアイルランド遠征中，99年7月フランスから侵入してきた Henry of Bolingbroke (後

の Henry IV, 父は John of Gaunt) の勝利は, Lancaster 家督相続を大義名分に, 町の中産階級の支持を期待して, 最切に上陸した北部でまず父親の tenants を召集し, ついで北部の magnates である Percies, Nevilles の援助, Bristol 城陥落で決定的, ついで, Edmund of Langley の不決断, Edward of Rutland, Richard Clifford, John Stanley の敗北後の裏切りによって決ったという。この Stanley については, 著者は *Gawain*-poet パトロン説を提出している。彼は南西 Lancashire 出身, Richard の親友 Robert de Vere に仕えて宮廷に入り頭角をあらわし, この Revolution に当っては Bolingbroke に貢献して大きな恩賞を受けている。1405年には, 当時南西 Lancashire では唯一の knight of the Garter 兼 King of the Isle of Man となり, また hereditary forester of Wirral でもあり, 北ウェールズ, マン島とも関係がある。*Sir Gawain* の方言が同じ南西 Lancashire, 'loyalty' が作品の大きな主題となっている点がこの説の根拠となっている。勿論, 作品の末尾にある 15 世紀書体の文字 "Hony Soyt qui mal pence" の承認を前提としている。Richard は 9 月30日退位し, 10月13日 Henry が即位し, Richard は捕われたまま 1400年 2 月 9-17日の間に Pontefract で死去。国会や Council が強力となり, フランスとの戦闘が再開された Henry IV 時代になっても, Richard II 時代と同じ宮廷社会が引き続き Eltham で営まれたという。

せまいが密接な環境の宮廷ですごした Richard の生涯は, 最後が中世的な悲劇であったとはいえ, きわめて romantic なものだったといえよう。美しい芸術的な絵巻物であった。歴史とはある時期の人間の活劇の姿であろうか。ここに14世紀末に関する, 質量ともに濃厚な料理が提供されたように思う。記述内容には詳細な研究の裏付けがある。そして文学が生きている。まず食べてみなければならない。著者に尊敬と敬意を表し, これを栄養素として吸収し, 私自身の研究の一つの発火点にしたい想いにかられる。Mathew 氏のビザンチン研究をまだ読んでいないため, *Medium Ævum* (Vol. XXXVII, No. 2 (1968), pp. 227-9) の彼自身の書評に見ら

れる，著者のビザンチン文化と西欧中世文化との関連性の明確な主張を取りあげることが出来なかったのは，かえすがえすも残念である。

(1969年7月)